様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３３２０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０４１５４

研究課題名（和文）青年期の双極性障害における自傷行為の機序に関する研究

研究課題名（英文）Study on the mechanisms of self-injurious behaviors in adolescents with bipolar disorder

研究代表者
大平　泰子（OHIRA, Taiko）

富山国際大学・子ども育成学部・准教授

研究者番号：００５５５１８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：自傷行為の経験に関する評価尺度であるDSHIの日本語版を作成し、その信頼性および妥当性について検討した。経験した自傷行為の男女差、それぞれの自傷行為の関連について検討するため、対象者数を増やして日本語版DSHIを実施した。また、双極性障害患者を対象として、自傷行為の経験と、解離症状や衝動性など自傷行為と関連すると思われる要因について検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
自傷行為尺度の日本語版を作成することによって、自傷行為の評価が容易に行え、今後の自傷行為に関する実証的研究に有用である。また、双極性障害と手首自傷の関連が指摘されているものの双極性障害患者を対象とした研究は少ない。

研究成果の概要（英文）：We created a Japanese version of the Deliberate Self-Harm Inventory (DSHI), an assessment scale for the experience of self-injurious behavior, and examined its reliability and validity. To investigate the sex difference in the experience of self-injurious behavior and its relationship with the respective self-injurious behaviors, we conducted a study using the Japanese version of DSHI with a larger number of subjects. With bipolar disorder patients as the subjects, we investigated the experience of self-injurious behavior and factors thought to be related to self-injurious behaviors, including dissociative symptoms and impulsivity.

研究分野：臨床心理学

キーワード：自傷行為　尺度　青年期　双極性障害

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

中学生・高校生・大学生における自傷行為(self-injurious behavior)の生涯経験率は、わが国では 3%～14%と報告されている(例えば Izutsu ほか,2006)。養護教諭を対象とした調査（松本ほか,2009）では、87.8%が自傷をする生徒に対応した経験があると回答しており、自傷行為は、医療機関のみならず学校現場においても対応に苦慮する問題行動の一つである。また、Owens D et al (2002）による系統的レビューによると、10 歳代における自傷行為や自殺未遂は 10 年後の自殺既遂の発生率を数百倍に高めると報告されている。自殺のリスク要因という観点からも青年期における自傷行為への対応は急務である。自傷行為は青年期の精神保健における重要な課題であるにもかかわらず、養護教諭の 69.6%が「どう対応すべきか分からなかった」と対応に苦慮している現状がある。また、自傷する者の多くがそのことを誰にも相談せず、自傷者の 90%が医療機関を受診しない(Hawton et al,2005)ことから、早期の対応が予後に大きく影響するといえ、自傷行為に関する適切な理解と対応が求められる。

自傷行為の機序については自傷行為に関するこれまでの研究は、事例研究として報告されることが多く、自傷行為に関する実証的データに裏付けられた検討は未だ多くない。自傷行為は、自殺を意図した行為と自殺を意図していない行為とに大別できるが、実際にはこの両者の境界は不明確であり、後者の典型として手首自傷が挙げられる。

自殺関連行事象を呈するうつ病の子どもは広い意味で双極性障害（躁うつ病）の可能性がある（Beck M et al, 2005）との指摘があり、精神科救急における自殺企図症例の検討では双極性障害と手首自傷とは強い関連がある（後藤,2009）と指摘されている。しかし、自傷行為は歴史的変遷から境界性人格障害との関連において議論されることが多く、双極性障害患者を対象とした研究は未だ少ない。

２．研究の目的

(1)　自傷行為に関する尺度の日本語版を作成し、作成した尺度について妥当性・信頼性の検討を行う。

(2)　自傷行為の経験率と性差について検討する。

(3)　青年期における自傷行為の経験率と、様々な自傷行為の関連性について検討する。

(4)　双極性障害患者を対象として自傷行為に関連が想定される諸要因について質問紙調査を行い、健常対照群と比較検討を行う。

３．研究の方法

(1)　Gratz(2001)によって作成された意図的な自傷行為に関する 17 項目からなる自己記入式の尺度である the Deliberate Self‐Harm Inventory (DSHI)の日本語版を作成した。原著者からの許諾を得た上で、翻訳逆翻訳手続きを使用して、日本語版の尺度を作成した。大学生 31 名を対象として予備調査を行い、作成した質問文について理解度において問題がないかという観点から日本語表現の推敲を行うとともに、各項目の出現頻度が英語原版と著しくかけ離れていないかを確認し、DSHI 英語原版と同じ 17 項目の質問項目を作成した。また、我々が作成した日本語版 DSHI について信頼性･妥当性の検討を行うため､日本語版 DSHI､QSFSB（岡田, 2002）、MCMI-II (井沢ら, 1995)、BDI-II、ERQ-J(吉津ら, 2013)を実施した。対象は 18 歳から 29 歳までの青年で、大学生および勤労者に質問紙調査を行った。分析対象は 149 名である。再検査信頼性の検討を行うため､追跡が可能であった大学生を対象として､3－4 週間後に日本語版 DSHI を再度実施した。再検査信頼性の検討については、分析対象は 45 名である。

(2)　日本語版 DSHI の作成にあたっての予備調査と妥当性・信頼性の検討を行うために実施した調査で得られたデータのうち、大学生のみを対象として性差の観点から分析を行った。自傷行為の経験率、経験した自傷行為の内容、自傷行為を初めて行った年齢について、男女で比較を行った。分析対象は大学生 159 名である。

(3)　15 歳から 30 歳までの青年 900 名（男女比 1：1）を対象にインターネット調査を行い、日本語版 DSHI を実施した。

(4)　双極性障害と診断された者を対象として、自傷行為、解離症状、衝動性、うつ症状、躁症状、自閉症傾向の調査を行った。対象は 17 歳から 28 歳で、男性 6 名、女性 23 名、計 29 名である。精神科受診歴のない者を対照群として、年齢と性別をマッチングさせた。

４．研究成果

(1)　日本語版 DSHI を作成し（表１）、信頼性および妥当性について検討した。内的整合性において若干の課題が残るものの、再検査信頼性については十分に高く、原版と同程度の再検査信頼性を有する尺度であることが示唆された。既存の尺度との相関分析の結果から、DSHI 日本語版は原版と同程度の収束的妥当性および弁別的妥当性を持つ尺度であることが示された。

表１　日本語版 DSHI の質問項目

1. 故意に（意図的に）自分の手首や腕、または身体の他の部分を（自殺するつもりなく）切ったことがありますか。（あてはまる方に○をつけてください）
2. 故意に（意図的に）自分の身体にたばこの火を押しつけたことがありますか。（あてはまる方に○をつけてください）
3. 故意に（意図的に）自分の身体をライターやマッチでやけどさせたことがありますか。（あてはまる方に○をつけてください）
4. 故意に（意図的に）自分の皮膚に文字を刻んだことがありますか。（あてはまる方に○をつけてください）
5. 故意に（意図的に）自分の皮膚に絵、模様、マークなどを刻んだことがありますか。（あてはまる方に○をつけてください）
6. 故意に（意図的に）傷跡が残ったり出血したりするほど強く自分の身体をひっかいたことがありますか。（あてはまる方に○をつけてください）
7. 故意に（意図的に）皮膚がさけるほど強く自分の身体をかんだことがありますか。（あてはまる方に○をつけてください）
8. 故意に（意図的に）自分の身体にサンドペーパーをこすりつけたことがありますか。（あてはまる方に○をつけてください）
9. 故意に（意図的に）自分の皮膚に酸を垂らしたことがありますか。（あてはまる方に○をつけてください）
10. 故意に（意図的に）漂白剤、クレンザー、オーブン用洗剤などで自分の身体をごしごしこすったことがありますか。（あてはまる方に○をつけてください）
11. 故意に（意図的に）縫い針、ピン、ホッチキス針のような尖ったものを自分の皮膚に刺したことがありますか。ただし、入れ墨、耳ピアス、薬物用注射針、ボディーピアスは除きます。（あてはまる方に○をつけてください）
12. 故意に（意図的に）自分の皮膚にガラスをこすりつけて傷つけたことがありますか。（あてはまる方に○をつけてください）
13. 故意に（意図的に）自分の骨を折ったことがありますか。（あてはまる方に○をつけてください）
14. 故意に（意図的に）あざができるほど強く自分の頭を何かにぶつけたことがありますか。（あてはまる方に○をつけてください）
15. 故意に（意図的に）あざができるほど強く自分で自分を殴ったことがありますか。（あてはまる方に○をつけてください）
16. 故意に（意図的に）自分の傷の治りを遅らせたことがありますか。（あてはまる方に○をつけてください）
17. 故意に（意図的に）このアンケートできかれたもの以外の方法で自分の身体を傷つけたことがありますか。（あてはまる方に○をつけてください）
「はい」の場合、どのように自分自身を傷つけたのですか。

(2)　大学生 159 名を対象に自傷行為の性差について検討を行った。その結果、これまでに何らかの自傷行為を行った経験がある大学生は、159 人のうち 22 人(13.8%)であった。男性では 64 人のうち 6 人(9.4%)、女性では 95 人のうち 16 人(16.8%)と女性のほうが高かったが、有意差は認められなかった。DSHI17 項目のうち経験があると回答した項目の数を平均すると、男性 0.16、女性 0.31 と、女性のほうが高得点であったが、有意差は認められなかった。初めて自傷行為を行った年齢は、最小値 8 歳、平均値 13.3 歳、最頻値 13 歳であった。性別でみると、男性で平均 10.3 歳、女性で平均 14.5 歳と、男性のほうが有意に低かった。

(3)　青年 900 名を対象にインターネット調査を行い、様々な自傷行為の経験率について日本語版 DSHI の 17 項目を用いて測定した（表２）。その結果、900 名のうち

表２　青年における各自傷行為の経験率

自傷行為	経験者数(%) n=900	
1. 切る	105	(11.7)
2. たばこの火を押しつける	10	(1.1)
3. ライターやマッチでやけど	14	(1.6)
4. 文字を刻む	40	(4.4)
5. 絵を刻む	38	(4.2)
6. ひっかく	114	(12.7)
7. かむ	34	(3.8)
8. サンドペーパーをこすりつける	10	(1.1)
9. 皮膚に酸をたらす	5	(0.6)
10. 漂白剤やクレンザーでこする	9	(1.0)
11. 尖ったものを刺す	63	(7.0)
12. 皮膚にガラスをこすりつける	13	(1.4)
13. 骨を折る	10	(1.1)
14. 頭をぶつける	44	(4.9)
15. 自分を殴る	52	(5.8)
16. 傷の治りを遅らせる	82	(9.1)
17. その他	54	(6.0)

234 名(26.0%)に何らかの自傷行為の経験がみられた。項目別では、「ひっかく」「切る」「傷の治りを遅らせる」「尖ったものを刺す」の順で多くみられた。今後は、より詳細な分析を行い、性差や項目間の関連等について検討を行う。

(4)　これまでに何らかの自傷行為の経験があった者は、双極性障害患者で 13 名（76.5%）、対照群で 3 名（16.6%）と双極性障害患者において有経験者が多い結果となった。行為ごとの経験率を表３に示す。「切る」行為は、双極性障害患者の約７割にみられた。今後、他の指標との関連について検討する。

表３　双極性障害患者における各自傷行為の経験率

自傷行為	経験者数(%)			
	患者群 n=17		対照群 n=17	
1. 切る	12	(70.6)	2	(11.8)
2. たばこの火を押しつける	0	(0.0)	0	(0.0)
3. ライターやマッチでやけど	0	(0.0)	0	(0.0)
4. 文字を刻む	1	(5.9)	0	(0.0)
5. 絵を刻む	1	(5.9)	0	(0.0)
6. ひっかく	5	(29.4)	1	(5.9)
7. かむ	2	(11.8)	0	(0.0)
8. サンドペーパーをこすりつける	0	(0.0)	0	(0.0)
9. 皮膚に酸をたらす	0	(0.0)	0	(0.0)
10. 漂白剤やクレンザーでこする	0	(0.0)	0	(0.0)
11. 尖ったものを刺す	2	(11.8)	1	(5.9)
12. 皮膚にガラスをこすりつける	2	(11.8)	0	(0.0)
13. 骨を折る	0	(0.0)	0	(0.0)
14. 頭をぶつける	3	(17.6)	0	(0.0)
15. 自分を殴る	1	(5.9)	0	(0.0)
16. 傷の治りを遅らせる	4	(23.5)	0	(0.0)
17. その他	6	(35.3)	1	(5.9)

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

① 大平泰子，本邦における自傷行為の経験率に関する研究レビュー．富山国際大学子ども育成学部紀要，査読無，第 8 巻，171-174，2017

② Taiko Ohira, Toshio Munesue, Manabu Oi, Kunitake Suzuki, Daisuke Saito, Investigation of the reliability and validity of the Japanese Deliberate Self-Harm Inventory, Journal of Brain Science, 査読有, 48, 14-42, 2018
DOI https://doi.org/10.20821/jbs.48.0_14

〔学会発表〕（計１件）

① 大平泰子，大学生における自傷行為の経験率とその性差．第 58 回日本心身医学会総会ならびに学術講演会，　2017 年 6 月 16 日，札幌コンベンションセンター，心身医学 第 57 巻第 6 号 p670

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

ホームページ等

なし

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：鈴木　国威

ローマ字氏名：SUZUKI Kunitake

所属研究機関名：大阪人間科学大学

部局名：人間科学部

職名：准教授

研究者番号（8 桁）：20580913

(2)研究協力者
研究協力者氏名：棟居　俊夫
ローマ字氏名：MUNESUE Toshio

※科研費による研究は、研究
者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。